

# 圏の「対数」

alg-d

[http://alg-d.com/math/kan\\_extension/](http://alg-d.com/math/kan_extension/)

2021年4月29日

圏  $C$  に対して、 $C \simeq \mathbf{Set}^D$  となるような圏  $D$  を  $C$  の「対数」ということにすれば、このような「対数」がいつ存在するかは既に分かっている（「Kan 拡張」の PDF を参照）。ここではそれとは違った観点から「対数」を考える\*<sup>1</sup>。

まず実数の場合について復習しておく。実数の和と積は可換であり、分配法則

$$(a + b) \times c = a \times c + b \times c$$

を満たすのであった。同様に積と冪も分配法則

$$(a \times b)^c = a^c \times b^c$$

を満たす。しかし積とは違って冪  $a^b$  は非可換である。ところが実は、「冪」の定義を少し変えると、分配法則と可換性両方が成り立つようにすることができる。それには演算  $a * b$  を  $a * b := a^{\log b}$  と定義すればよい。これは容易に分かるように

$$(a \times b) * c = (a * c) \times (b * c), \quad a * b = b * a$$

を満たす。

さて、圏の直和を和、直積を積と思えば、圏の場合もこれらは可換であり、分配法則

$$(A \amalg B) \times C = (A \times C) \amalg (B \times C)$$

が成り立つが、上記の演算  $*$  についても、圏バージョンを考えることができる。そのために準備をする。

定義.  $C, D, U$  を圏、 $F: D \rightarrow C$ 、 $E: U \rightarrow C$  を関手とする。  $F$  に沿った  $E$  の左 Kan リフトとは組  $\langle F_+ E, \eta \rangle$  であって、以下の条件を満たすものである。

---

\*<sup>1</sup> これは、以前 S さんに教えてもらった内容 [1] を文書化したものです。S さん、ありがとうございます。

(1)  $F_{\dagger}E$  は関手  $U \rightarrow D$  で,  $\eta$  は自然変換  $E \Rightarrow F \circ F_{\dagger}E$  である.

$$\begin{array}{ccc}
 D & & \\
 F \downarrow & \swarrow F_{\dagger}E & \\
 C & \xleftarrow{E} & U
 \end{array}
 \quad \eta \Uparrow$$

(2) 組  $\langle S, \theta \rangle$  が同じ条件を満たす (即ち  $S: U \rightarrow D$  は関手で  $\theta: E \Rightarrow F \circ S$  は自然変換) ならば, 自然変換  $\tau: F_{\dagger}E \Rightarrow S$  が一意に存在して  $\theta = F\tau \circ \eta$  となる. 即ち次の等式が成り立つ.

$$\begin{array}{ccc}
 D & \xleftarrow{S} & \\
 F \downarrow & \swarrow F_{\dagger}E & \nearrow S \\
 C & \xleftarrow{E} & U
 \end{array}
 \quad \eta \Uparrow \quad \tau \Uparrow
 \quad = \quad
 \begin{array}{ccc}
 D & \xleftarrow{S} & \\
 F \downarrow & \swarrow \theta & \nearrow \\
 C & \xleftarrow{E} & U
 \end{array}$$

即ち左 Kan リフトとは, 左 Kan 拡張の定義において関手の向きを逆にしたものである. 絶対左 Kan リフトについても絶対左 Kan 拡張と同様に定義できる.

定義.  $F: D \rightarrow C$ ,  $E: U \rightarrow C$ ,  $K: V \rightarrow U$  を関手として左 Kan リフト  $\langle F_{\dagger}E, \eta \rangle$  が存在するとする.

$$\begin{array}{ccc}
 D & & \\
 F \downarrow & \swarrow F_{\dagger}E & \\
 C & \xleftarrow{E} & U \xleftarrow{K} V
 \end{array}
 \quad \eta \Uparrow$$

このとき  $K$  が左 Kan リフト  $\langle F_{\dagger}E, \eta \rangle$  と交換するとは,  $K$  を合成して得られる次の図式も左 Kan リフトとなることを言う.

$$\begin{array}{ccc}
 D & & \\
 F \downarrow & \swarrow (F_{\dagger}E) \circ K & \\
 C & \xleftarrow{E} & U \xleftarrow{K} V
 \end{array}
 \quad \eta_K \Uparrow$$

定義.  $F: D \rightarrow C$ ,  $E: U \rightarrow C$  を関手として左 Kan リフト  $F_{\dagger}E$  が存在するとする.  $F_{\dagger}E$  が任意の関手  $K: V \rightarrow U$  と交換するとき,  $F_{\dagger}E$  は絶対左 Kan 拡張であるという.

Kan 拡張のときと全く同様にして次の定理が得られる.

定理 1.  $G: D \rightarrow C$  を関手とするとき、以下の条件は同値である.

- (1)  $G$  が左随伴を持つ.
- (2) 絶対左 Kan リフト  $\langle G \dashv \text{id}_C, \eta \rangle$  が存在する.
- (3) 左 Kan リフト  $\langle G \dashv \text{id}_C, \eta \rangle$  が存在し,  $G$  が  $G \dashv \text{id}_C$  と交換する.

$$\begin{array}{ccc}
 D & & \\
 \downarrow G & \swarrow G \dashv \text{id}_C & \\
 C & \xleftarrow{\text{id}_C} & C \xleftarrow{G} D
 \end{array}$$

またこのとき  $G \dashv \text{id}_C \dashv G$  であり  $\eta$  がその unit である. □

これを使うことで次の命題を得る.

命題 2.  $C, D$  を圏,  $F \dashv G: C \rightarrow D$ ,  $F' \dashv G': C \rightarrow D$  を随伴関手とする. このとき自然変換  $F \Rightarrow F'$  と  $G' \Rightarrow G$  は一対一に対応する.

証明. 随伴  $F \dashv G$ ,  $F' \dashv G'$  の unit をそれぞれ  $\eta, \eta'$  とする. このとき  $G \dashv \text{id}_C \cong F$ ,  $F' \dashv \text{id}_C \cong G'$  である. よって左 Kan 拡張, 左 Kan リフトの普遍性から, 等式

$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccc}
 & D & \\
 F' \nearrow & & \searrow G \\
 C & \xrightarrow{F} & C \\
 \uparrow \varphi & & \uparrow \eta \\
 & & 
 \end{array}
 & = &
 \begin{array}{ccc}
 & D & \\
 F' \nearrow & & \searrow G \\
 C & \xrightarrow{G'} & C \\
 \uparrow \eta' & & \uparrow \psi \\
 & & 
 \end{array}
 \end{array}$$

により  $\varphi: F \Rightarrow F'$  と  $\psi: G' \Rightarrow G$  が一対一に対応する. (即ち, 任意の  $\varphi$  に対して, 一意に  $\psi$  が存在して等式が成立し, また任意の  $\psi$  に対して一意に  $\varphi$  が存在して等式が成り立つ.) □

そこで, 随伴の圏  $\text{Adj}(C, D)$  を次のように定義することができる.

定義. 圏  $C, D$  に対して, 圏  $\text{Adj}(C, D)$  を

- $\text{Ob}(\text{Adj}(C, D)) := \{F \dashv G: C \rightarrow D\}$ .
- $\text{Hom}_{\text{Adj}(C, D)}(F \dashv G, F' \dashv G') := \text{Hom}_{DC}(F, F') \cong \text{Hom}_{CD}(G', G)$ .

により定める.

これを使うことでいよいよ  $*$  を定義することができる.

定義. 圏  $C, D$  に対して  $C * D := \text{Adj}(C, D^{\text{op}})^{\text{op}}$ .

命題 3.  $C * D = D * C$  である.

証明.  $\text{Adj}(C, D) = \text{Adj}(D^{\text{op}}, C^{\text{op}})$  だから

$$C * D = \text{Adj}(C, D^{\text{op}})^{\text{op}} = \text{Adj}(D, C^{\text{op}})^{\text{op}} = D * C$$

である. □

命題 4.  $A, B, C$  を圏として,  $A, B$  は始対象  $0$  を持ち,  $C$  は二項余直積を持つとする. このとき  $(A \times B) * C \simeq (A * C) \times (B * C)$  である.

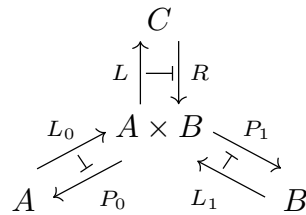
証明. 示すべき圏同値は  $\text{Adj}(A \times B, C^{\text{op}})^{\text{op}} \simeq \text{Adj}(A, C^{\text{op}})^{\text{op}} \times \text{Adj}(B, C^{\text{op}})^{\text{op}}$  だから  $\text{Adj}(A \times B, C) \simeq \text{Adj}(A, C) \times \text{Adj}(B, C)$  を示せばよい.

$P_0: A \times B \rightarrow A, P_1: A \times B \rightarrow B$  を射影とする.  $P_0, P_1$  は左随伴  $L_0, L_1$  を持つ.

$\therefore 0 \dashv !: \mathbb{1} \rightarrow B$  だから  $A = A \times \mathbb{1} \xrightarrow{\text{id}_A \times 0} A \times B$  を  $L_0$  とすれば  $L_0 \dashv P_0$  である.  
 $L_1$  についても同様.

よって関数

$$\begin{array}{ccc} X: \text{Ob}(\text{Adj}(A \times B, C)) & \longrightarrow & \text{Ob}(\text{Adj}(A, C) \times \text{Adj}(B, C)) \\ \Downarrow & & \Downarrow \\ (L \dashv R) & \longmapsto & \langle LL_0 \dashv P_0 R, LL_1 \dashv P_1 R \rangle \end{array}$$



が得られる. これは関手になる. 逆向きの関数

$$\begin{array}{ccc} Y: \text{Ob}(\text{Adj}(A, C) \times \text{Adj}(B, C)) & \longrightarrow & \text{Ob}(\text{Adj}(A \times B, C)) \\ \Downarrow & & \Downarrow \\ \langle L_0 \dashv R_0, L_1 \dashv R_1 \rangle & \longmapsto & (\Pi \circ (L_0 \times L_1) \dashv (R_0 \times R_1) \circ \Delta) \end{array}$$

$$A \times B \begin{array}{c} \xrightarrow{L_0 \times L_1} \\ \xleftarrow[R_0 \times R_1]{\perp} \end{array} C \times C \begin{array}{c} \xrightarrow{\Pi} \\ \xleftarrow[\Delta]{\perp} \end{array} C$$

も得られる。これも関手になる。これらは互いに逆の関手を与える。

∴)  $L \dashv R: A \times B \rightarrow C$  とすると

$$\begin{aligned} YX(L \dashv R) &= Y(LL_0 \dashv P_0R, LL_1 \dashv P_1R) \\ &= (\Pi \circ (LL_0 \times LL_1) \dashv (P_0R \times P_1R) \circ \Delta) \end{aligned}$$

である。  $a \in A$ ,  $b \in B$  に対して

$$\begin{aligned} \Pi \circ (LL_0 \times LL_1)(a, b) &= LL_0(a) \amalg LL_1(b) \\ &= L(a, 0) \amalg L(0, b) \\ &\cong L(a, b) \end{aligned}$$

であり,  $c \in C$  に対して

$$(P_0R \times P_1R) \circ \Delta(c) = \langle P_0R(c), P_1R(c) \rangle = R(c)$$

だから  $YX(L \dashv R) \cong (L \dashv R)$  である。一方

$$\begin{aligned} XY(L_0 \dashv R_0, L_1 \dashv R_1) &= X(\Pi \circ (L_0 \times L_1) \dashv (R_0 \times R_1) \circ \Delta) \\ &= \langle \Pi \circ (L_0 \times L_1) \circ L_0 \dashv P_0 \circ (R_0 \times R_1) \circ \Delta, \\ &\quad \Pi \circ (L_0 \times L_1) \circ L_1 \dashv P_1 \circ (R_0 \times R_1) \circ \Delta \rangle \end{aligned}$$

であり,  $a \in A$ ,  $b \in B$ ,  $c \in C$  に対して

$$\begin{aligned} \Pi \circ (L_0 \times L_1) \circ L_0(a) &= L_0(a) \amalg L_1(0) \\ &\cong L_0(a) \amalg 0 \\ &\cong L_0(a) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} P_0 \circ (R_0 \times R_1) \circ \Delta(c) &= P_0(R_0(c), R_1(c)) \\ &= R_0(c) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \Pi \circ (L_0 \times L_1) \circ L_1(b) &= L_0(0) \amalg L_1(b) \\ &\cong 0 \amalg L_1(b) \\ &\cong L_1(b) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} P_1 \circ (R_0 \times R_1) \circ \Delta(c) &= P_1(R_0(c), R_1(c)) \\ &= R_1(c) \end{aligned}$$

より  $XY(L_0 \dashv R_0, L_1 \dashv R_1) \cong \langle L_0 \dashv R_0, L_1 \dashv R_1 \rangle$  である.

従って  $\text{Adj}(A \times B, C) \simeq \text{Adj}(A, C) \times \text{Adj}(B, C)$  が分かる.  $\square$

つまり今定義した  $C * D$  という演算は可換でかつ (ある程度の条件の下で) 積に対して分配法則が成り立つ. よってこれは実数の場合の  $*$  の圏バージョンであると考えられる. そこで, 実数の場合に倣って  $C^{\log(D)} := C * D = \text{Adj}(C, D^{\text{op}})^{\text{op}}$  と書くことにする.\*2

**命題 5.**  $A, B, C$  を圏として,  $A$  は二項余直積を持ち  $B, C$  は始対象  $0$  を持つとする. このとき  $A^{\log(B \times C)} \simeq A^{\log(B)} \times A^{\log(C)}$  である. (この意味で  $\log(B \times C) = \log(B) + \log(C)$  と思うことができる.)

**証明.** 命題 4 から明らか.  $\square$

**命題 6.** 圏  $A$  が終対象を持つとき  $A^{\log(\mathbb{1})} \simeq \mathbb{1}$  である. (この意味で  $\log(\mathbb{1}) = 0$  と思うことができる.)

**証明.**  $A$  が終対象  $1$  を持つから  $\text{Adj}(A, \mathbb{1}) \simeq \{! \dashv 1: A \rightarrow \mathbb{1}\} = \mathbb{1}$  となる. 従ってこの場合  $A^{\log(\mathbb{1})} = \text{Adj}(A, \mathbb{1}^{\text{op}})^{\text{op}} \simeq \mathbb{1}$  である.  $\square$

**命題 7.**  $A \neq 0$  のとき  $A^{\log(0)} = 0$  である.

**証明.**  $A (\neq 0)$  から  $0$  への関手は存在しないから  $A^{\log(0)} = \text{Adj}(A, 0^{\text{op}})^{\text{op}} = 0$ .  $\square$

**命題 8.**  $U$  が余完備のとき,  $U^{\log(\text{Set}^C)} \simeq U^C$  である. (この意味で  $\log(\text{Set}^C) = C$  と思うことができる.)

**証明.** 示すべき圏同値は  $\text{Adj}(\text{Set}^C, U^{\text{op}})^{\text{op}} \simeq U^C$  だから  $\text{Adj}(\text{Set}^{C^{\text{op}}}, U^{\text{op}}) \simeq (U^{\text{op}})^{C^{\text{op}}}$  を示せばよい. 即ち  $\text{Adj}(\widehat{C}, U) \simeq U^C$  を示せばよい.

米田埋込  $y: C \rightarrow \widehat{C}$  により関手  $y^\dagger: U^C \rightarrow U^{\widehat{C}}$  が得られる.

$$\begin{array}{ccc}
 \widehat{C} & & \\
 \uparrow y & \swarrow y^\dagger F & \\
 C & \xrightarrow{F} & U
 \end{array}$$

\*2  $C^{\log(D)}$  で一つの記号であり,  $\log(D)$  が定義されるわけではない.

普遍随伴により  $y^\dagger: U^C \rightarrow \text{Adj}(\widehat{C}, U)$  であり, これは本質的全射である.  $y$  が忠実充満だから  $y^\dagger$  も忠実充満で, 故に  $y^\dagger$  は圏同値である.  $\square$

命題 9. 圏  $U$  が余完備のとき  $\mathbf{Set}^{\log(U)} \simeq U$  である. (これは  $e^{\log x} = x$  に対応する.)

証明. 命題 8 により  $\mathbf{Set}^{\log(U)} = U^{\log(\mathbf{Set})} \simeq U$  である.  $\square$

## 参考文献

[1] ft\_math さんによる圏論祭, 2012年12月8日, [http://alg-d.com/math/ft\\_math/](http://alg-d.com/math/ft_math/)